

## 上演 memo

### 作品 memo

・

### 即興 memo

#### ・模範がない

初めて者にとって模範がない  
教えてしまうものではないし 教えなくてはわからないもの  
即興上演をイメージできるかどうか

#### ・演劇における即興様式

稽古の過程ではなく、演劇上演形式として確立させていくこと

・身体性を軸に、人間への認識を示していく行為  
認識伝達こうい  
言葉では、振り付けでは語れぬものがある つまり記号では語れもの

#### ・失うものと、得るもの

#### ・創造性への問いかけ

予定調和ではない  
どのような秩序を見出していくのか  
あるいは壊していくのか

#### ・即興における意志

沈黙への意志  
動くことの意志 動かぬことの意志  
自分の位置における意志 他者との距離  
視線への意志  
エネルギーへの意志 抑制と緊張h

### 俳優にとって

#### ・意識の切り替え

自己表現からの解放 脱却  
意志の持続と断念 r

#### ・動きを表面的にしない 説明的にしない 身体的にすること

具体的にはエネルギー的にすること 均一にしないこと

#### ・精神と身体のバランス

身体への集中力とともに、精神的な切り取りを見せていく  
精神は 精神は肉体の興奮に巻き込まれるべきではない  
身体は精神の表れではない、身体は 精神の論理に支配されるべきではない

#### ・冷静さと身体の掘り起こし

#### ・作業の進行の見極め方

通常稽古を通して作品は建てられていくもの  
同じく役作りも身体を構造化していくもの

反対に即興は、固定してしまうものを排除していくもの  
すでに持っている観念、稽古の過程で身につけてしまうもの  
にも係われず身体と精神で作品の特徴を見出していく必要がある

・場を見切ること

応答すること フォーカシングすること

・受け止めること

・身体のままさまざまな位相と捕らえること

抽象 等身大のエネルギー 自然的エネルギー  
具象 非等身大のエネルギー 抑制された身体

おぼろげな感覚

明晰な画像

記憶と想像力 表層的なネガ 深層的なネガ

・沈黙する身体

・裏の身体

・表の身体

・分裂する身体

・

・感じる能力 受け止める能力

・自己認識

わかっていることと わかていないこと

演出

・即興上演の作品化

作品。上演をイメージすること

即興行為に枠つけること

・その具体性を考えること

・ k m

舞台は基本的には日常の中

そこから集中力も持つことによる

日常は違った時空間の中新たな様相を呈しはじめる

日常の時空間の中に組み込まれていたものの意味は

浮遊し始め、ものは意味から切れ話され本来のほ実存を呈する

身体的にわかっていることとわかていないこと

サラエボや刑務所での『ゴドー』の上演

自分たちの状況を見て取る

—20 世紀芸術は、“密室的な監禁状態”を表象しようとする。監視下にあるものをスペクタクルとして見るという逆説的な状態をわれわれに経験させる

—ベケットの空間を特徴付ける密室的な閉鎖性こそ、フーコーに倣うならば、スペクタクルの終焉の果てに、われわれが手にした劇の形式 さらにこうした状況における行動の不可能性

「アウシュビッツ以降、芸術は不可能である」というアドルノ的提起に対する一つの解答 演劇は不可能性を提示しつつ、衝撃を与えるもの

## タイトル

即興的な創作方法をとっているダムにとって、  
タイトルは記憶の引出しのラベルだ

がしかし今回のトマトをたべるのをやめたときは二つの点で異なる

1. 名前をつけた時点にまつわる出来事 舞台への強いモチベーションを構成する

## 作品の挑戦

意味の生成を、出来る限り、上演の場にゆだねること

## memo

9.11 のショックによる反省的回路の喪失

芸術は現実に対する応答である

### ●鴻

- ・エイズとともに語られてきた機能不全の身体 から錯乱する身体
- ・テロの身体が錯乱する身体と結びついていた

・アジア演劇はさまざまな場所によって違った形で近代と触れ合っている  
その異質なものの接合をサイボーグ

### ●memo

- ・絶え間ない無化作業の中での記憶化 想像力
- ・Yes, Yes, Yes なんか 最後のシーンは？

### ●9.11 の衝撃は何か

- ・死者の数か？
- ・暴力の主体か 目に見えない敵か
- ・暴力の対象か アメリカか
- ・暴力の形態か
- ・暴力の大義名分か
- ・暴力の提示か 劇場型の暴力

常に時代の技術革新の中で変化してきた

戦争がわれわれの自明性に突きつけられている

戦争がどこで起きているのか

## 「トマトをたべるのをやめたとき」について

この作品には主だったストーリーや筋はないし、もともになる原作もない。

あるいは固定した主題があるわけでもない。この作品を生み出すものは、観客の眼前に立つ俳優たちの身体であり、その身体の記憶から生まれる想像力である。

この作品は、観客をそこに迎え入れるためにあらかじめ用意されたたとえば堅牢な建築物ではないのだ。むしろわれわれは観客とともに被造物のまだ何もない荒野に立とうとしている。

意図すること、それを断念すること。生み出すこと、それを消滅させること。  
その往還の中で揺れ動き続ける、今、ここ、での生そのものが、この作品の実体をなすのだ。  
作品は一回毎の上演の中で、その上演の瞬間毎の現在の中で、初めてその姿を現すのだ。  
連綿と続く有形無形の動きや声、言葉の断片。それらいくつもの生の挙動が折り重なり、時にぶつかり合い、同調し、ズレ、交錯する。  
上演以前にわれわれはこの作品の本当の姿を知ることにはない。この作品は、その上演の場で、われわれがそこで何を見、何を聞き、何に触れたのか？ そして、何を見ず、何を聞かず、何に触れなかったのか、についての“報告”になるのだ。

だから、上演以前に用意されるこの作品タイトル「トマトを食べるのをやめたとき」—S.I.Witkiewiczのテキストから偶然見つけられた一は、上演の場で生み出されていく俳優達のこの報告を、観客が記憶に留めて置く為の「引き出し」につける“ラベル”のようなものなのだ。このラベルの意味と上演の内容とは直接的な結びつきを持たない。だがその無関係な言葉と上演がセットになってこの作品は見る者の記憶の中でさらに発展し続けることになるだろう。

だが同時にまたこのラベルは、私たちににとってはさらにより重要な意味を持つことになったのだ。私たちが昨年そのラベルにしようとする言葉を見つけた時点で遭遇した重要な記憶を留めてもいるからだ。すなわち「September 11」についてである。  
想像を絶する暴力の映像が、あまりにも美しく、果てしなく繰り返される中で、われわれはその出来事を、自らの内になんら確証できないでいる。われわれの身体が世界とますます切り離されていく。瓦礫に、砂に、埋もれた死体のように、われわれの身体が日常の中で何処かに奪われていくのだ。われわれはそのわだかまりの中で、再びこう問いかけるのだ、何を見、何を聞き、何に触れたのか？ いや、われわれは何を見ず、何を聞かず、何に触れてこなかったのか？  
偶然見つけたラベルの引き出しの中に、われわれはこのわだかまりを強く留めることになったのだ。われわれがこの作品の上演の中で行う報告の数々は、たとえその一部でも、このわだかまりへの答えになるだろう。この引き出しがその答えで一杯にならない限りこの作品は、われわれを挑発するところを止めない。まだ隠されているかも知れない新たな答えの可能性が上演の場で報告されつづける限り、この作品は、上演ごとに、その一瞬ごとに、あらたな相貌を呈し発展しつづけることになるだろう。

## 新規

かつて記号はそれが示す内容と呼び起こすことが出来たのかも知れなかった、今日の事態は、全くそれは不可能になった。  
想像を越える経験  
のなかでわれわれはどんな表象を持ちえるだろうか  
その不可能性中から立ち上がらなければならない

### 「トマトを食べるのをやめたとき」について

この作品には主だったストーリーや筋はないし、もともになる原作もない。  
あるいは固定した主題があるわけでもない。この作品を生み出すものは、観客の眼前に立つ俳優たちの身体であり、その身体**の記憶から生まれる想像力**である。

この作品は、観客をそこに迎え入れるためにあらかじめ用意されたたとえば堅牢な建築物ではないのだ。むしろわれわれは観客とともに被造物のまだ何もない荒野に立とうとしている。  
意図すること、それを断念すること。生み出すこと、それを消滅させること。  
その往還の中で揺れ動き続ける、今、ここ、での生そのものが、この作品の実体をなすのだ。

作品は一回毎の上演の中で、その上演の瞬間毎の現在の中で、初めてその姿を現すのだ。連綿と続く有形無形の動きや声、言葉の断片。それらいくつもの生の挙動が折り重なり、時にぶつかり合い、同調し、ズレ、交錯する。

上演以前にわれわれはこの作品の本当の姿を知ることはない。この作品は、その上演の場で、われわれがそこで何を見、何を聞き、何に触れたのか？ そして、何を見ず、何を聞かず、何に触れなかったのか、についての“報告”になるのだ。

だから、上演以前に用意されるこの作品タイトル「トマトを食べるのをやめたとき」—S.I.Witkiewiczのテキストから偶然見つけられた—は、上演の場で生み出されていく俳優達のこの報告を、観客が記憶に留めて置く為の「引き出し」につける“ラベル”のようなものなのだ。このラベルの意味と上演の内容とは直接的な結びつきを持たない。だがその無関係な言葉と上演がセットになってこの作品は見る者の記憶の中でさらに発展し続けることになるだろう。

だが同時にまたこのラベルは、私たちににとってはさらにより重要な意味を持つことになったのだ。私たちが昨年そのラベルにしようとする言葉を見つけた時点で遭遇した重要な記憶を留めてもいるからだ。すなわち「September 11」についてである。

想像を絶する暴力の映像が、あまりにも美しく、果てしなく繰り返される中で、われわれはその出来事を、自らの内になんら確証できないでいる。われわれの身体が世界とますます切り離されていく。瓦礫に、砂に、埋もれた死体のように、われわれの身体が日常の中で何処かに奪われていくのだ。われわれはそのわだかまりの中で、再びこう問いかけるのだ、何を見、何を聞き、何に触れたのか？ いや、われわれは何を見ず、何を聞かず、何に触れてこなかったのか？

偶然見つけたラベルの引き出しの中に、われわれはこのわだかまりを強く留めることになったのだ。われわれがこの作品の上演の中で行う報告の数々は、たとえその一部でも、このわだかまりへの答えになるだろう。この引き出しがその答えで一杯にならない限りこの作品は、われわれを挑発するとことを止めない。まだ隠されているかも知れない新たな答えの可能性が上演の場で報告されつづける限り、この作品は、上演ごとに、その一瞬ごとに、あらたな相貌を呈し発展しつづけることになるだろう。

## 新規

かつて記号はそれが示す内容と呼び起こすことが出来たのかも知れない  
だが、今日の事態は、全くそれは不可能になった。

想像を越える経験

のなかでわれわれはどんな表象を持ちえるだろうか

その不可能性中から立ち上がらなければならない

こう

### 8.6 荒野へ進み出ること

品 memo

サラエボや刑務所での『ゴドー』の上演

自分たちの状況を見て取る

—20世紀芸術は、“密室的な監禁状態”を表象しようとする。監視下にあるものをスペクタクルとして見るという逆説的な状態をわれわれに経験させる

—ベケットの空間を特徴付ける密室的な閉鎖性こそ、フーコーに倣うならば、スペクタクルの終焉の

果てに、われわれが手にした劇の形式 さらにこうした状況における行動の不可能性  
「アウシュビッツ以降、芸術は不可能である」というアドルノ的提起に対する一つの解答 演劇は不可能性を提示しつつ、衝撃を与えるもの

## タイトル

即興的な創作方法をとっているダムにとって、  
タイトルは記憶の引出しのラベルだ

がしかし今回のトマトを食べるのをやめたときは二つの点で異なる

1. 名前をつけた時点にまつわる出来事 舞台への強いモチベーションを構成する

## 作品の挑戦

意味の生成を、出来る限り、上演の場にゆだねること

## memo

9.11 のショックによる反省的回路の喪失

芸術は現実に対する応答である

### ●鴻

- ・エイズとともに語られてきた機能不全の身体 から錯乱する身体
- ・テロの身体が錯乱する身体と結びついていた
  
- ・アジア演劇はさまざまな場所によって違った形で近代と触れ合っている  
その異質なものの接合をサイボーグ

### ●memo

- ・絶え間ない無化作業の中での記憶化 想像力
- ・Yes, Yes, Yes なんか 最後のシーンは？

### ●9.11 の衝撃は何か

- ・死者の数か？
- ・暴力の主体か 目に見えない敵か
- ・暴力の対象か アメリカか
- ・暴力の形態か
- ・暴力の大義名分か
- ・暴力の提示か 劇場型の暴力

常に時代の技術革新の中で変化してきた

戦争がわれわれの自明性に突きつけられている  
戦争がどこで起きているのか

## 「トマトを食べるのをやめたとき」について

この作品には主だったストーリーや筋はないし、もともになる原作もない。  
あるいは固定した主題があるわけでもない。この作品を生み出すものは、観客の眼前に立つ俳優たちの身体であり、その身体の記憶から生まれる想像力である。

この作品は、観客をそこに迎え入れるためにあらかじめ用意されたたとえば堅牢な建築物ではないの

だ。むしろわれわれは観客とともに被造物のまだ何もない荒野に立とうとしている。  
意図すること、それを断念すること。生み出すこと、それを消滅させること。  
その往還の中で揺れ動き続ける、今、ここ、での生そのものが、この作品の実体をなすのだ。  
作品は一回毎の上演の中で、その上演的瞬間毎の現在の中で、初めてその姿を現すのだ。  
連綿と続く有形無形な動きや声、言葉の断片。それらいくつもの生の挙動が折り重なり、時にぶつかり合い、同調し、ズレ、交錯する。  
上演以前にわれわれはこの作品の本当の姿を知ることはない。この作品は、その上演の場で、われわれがそこで何を見、何を聞き、何に触れたのか？ そして、何を見ず、何を聞かず、何に触れなかったのか、についての“報告”になるのだ。

だから、上演以前に用意されるこの作品タイトル「トマトを食べるのをやめたとき」—S.I.Witkiewiczのテキストから偶然見つけられた—は、上演の場で生み出されていく俳優達のこの報告を、観客が記憶に留めて置く為の「引き出し」につける“ラベル”のようなものなのだ。このラベルの意味と上演の内容とは直接的な結びつきを持たない。だがその無関係な言葉と上演がセットになってこの作品は見る者の記憶の中でさらに発展し続けることになるだろう。

だが同時にまたこのラベルは、私たちににとってはさらにより重要な意味を持つことになったのだ。私たちが昨年そのラベルにしようとする言葉を見つけた時点で遭遇した重要な記憶を留めてもいるからだ。すなわち「September 11」についてである。  
想像を絶する暴力の映像が、あまりにも美しく、果てしなく繰り返される中で、われわれはその出来事を、自らの内になんら確証できないでいる。われわれの身体が世界とますます切り離されていく。瓦礫に、砂に、埋もれた死体のように、われわれの身体が日常の中で何処かに奪われていくのだ。われわれはそのわだかまりの中で、再びこう問いかけるのだ、何を見、何を聞き、何に触れたのか？ いや、われわれは何を見ず、何を聞かず、何に触れてこなかったのか？  
偶然見つけたラベルの引き出しの中に、われわれはこのわだかまりを強く留めることになったのだ。われわれがこの作品の上演の中で行う報告の数々は、たとえその一部でも、このわだかまりへの答えになるだろう。この引き出しがその答えで一杯にならない限りこの作品は、われわれを挑発するとことを止めない。まだ隠されているかも知れない新たな答えの可能性が上演の場で報告されつづける限り、この作品は、上演ごとに、その一瞬ごとに、あらたな相貌を呈し発展しつづけることになるだろう。

## 新規

かつて記号はそれが示す内容と呼び起こすことが出来たのかも知れない  
だた、今日の事態は、全くそれは不可能になった。  
想像を越える経験  
のなかでわれわれはどんな表象を持ちえるだろうか  
その不可能性中から立ち上がらなければならない

### 「トマトを食べるのをやめたとき」について

この作品には主だったストーリーや筋はないし、もともになる原作もない。  
あるいは固定した主題があるわけでもない。この作品を生み出すものは、観客の眼前に立つ俳優たちの身体であり、その身体の記憶から生まれる想像力である。

この作品は、観客をそこに迎え入れるためにあらかじめ用意されたたとえば堅牢な建築物ではないのだ。むしろわれわれは観客とともに被造物のまだ何もない荒野に立とうとしている。  
意図すること、それを断念すること。生み出すこと、それを消滅させること。

その往還の中で揺れ動き続ける、今、ここ、での生そのものが、この作品の実体をなすのだ。作品は一回毎の上演の中で、その上演の瞬間毎の現在の中で、初めてその姿を現すのだ。連綿と続く有形無形の動きや声、言葉の断片。それらいくつもの生の挙動が折り重なり、時にぶつかり合い、同調し、ズレ、交錯する。上演以前にわれわれはこの作品の本当の姿を知ることはない。この作品は、その上演の場で、われわれがそこで何を見、何を聞き、何に触れたのか？ そして、何を見ず、何を聞かず、何に触れなかったのか、についての“報告”になるのだ。

だから、上演以前に用意されるこの作品タイトル「トマトを食べるのをやめたとき」—S.I.Witkiewiczのテキストから偶然見つけられた—は、上演の場で生み出されていく俳優達のこの報告を、観客が記憶に留めて置く為の「引き出し」につける“ラベル”のようなものなのだ。このラベルの意味と上演の内容とは直接的な結びつきを持たない。だがその無関係な言葉と上演がセットになってこの作品は見る者の記憶の中でさらに発展し続けることになるだろう。

だが同時にまたこのラベルは、私たちににとってはさらにより重要な意味を持つことになったのだ。私たちが昨年そのラベルにしようとする言葉を見つけた時点で遭遇した重要な記憶を留めてもいるからだ。すなわち「September 11」についてである。

想像を絶する暴力の映像が、あまりにも美しく、果てしなく繰り返される中で、われわれはその出来事を、自らの内になんら確証できないでいる。われわれの身体が世界とますます切り離されていく。瓦礫に、砂に、埋もれた死体のように、われわれの身体が日常の中で何処かに奪われていくのだ。われわれはそのわだかまりの中で、再びこう問いかけるのだ、何を見、何を聞き、何に触れたのか？ いや、われわれは何を見ず、何を聞かず、何に触れてこなかったのか？

偶然見つけたラベルの引き出しの中に、われわれはこのわだかまりを強く留めることになったのだ。われわれがこの作品の上演の中で行う報告の数々は、たとえその一部でも、このわだかまりへの答えになるだろう。この引き出しがその答えで一杯にならない限りこの作品は、われわれを挑発するところを止めない。まだ隠されているかも知れない新たな答えの可能性が上演の場で報告されつづける限り、この作品は、上演ごとに、その一瞬ごとに、あらたな相貌を呈し発展しつづけることになるだろう。

## 新規

かつて記号はそれが示す内容と呼び起こすことが出来たのかも知れない  
だが、今日の事態は、全くそれは不可能になった。

想像を越える経験

のなかでわれわれはどんな表象を持ちえるだろうか

その不可能性中から立ち上がらなければならない

こう

### 8.6 荒野へ進み出ること

品 memo

サラエボや刑務所での『ゴドー』の上演

自分たちの状況を見て取る

—20世紀芸術は、“密室的な監禁状態”を表象しようとする。監視下にあるものをスペクタクルとして見るという逆説的な状態をわれわれに経験させる

—ベケットの空間を特徴付ける密室的な閉鎖性こそ、フーコーに倣うならば、スペクタクルの終焉の果てに、われわれが手にした劇の形式 さらにこうした状況における行動の不可能性  
「アウシュビッツ以降、芸術は不可能である」というアドルノ的提起に対する一つの解答 演劇は不可能性を提示しつつ、衝撃を与えるもの

## タイトル

即興的な創作方法をとっているダムにとって、  
タイトルは記憶の引出しのラベルだ

がしかし今回のトマトを食べるのをやめたときは二つの点で異なる

1. 名前をつけた時点にまつわる出来事 舞台への強いモチベーションを構成する

## 作品の挑戦

意味の生成を、出来る限り、上演の場にゆだねること

## memo

9.11 のショックによる反省的回路の喪失

芸術は現実に対する応答である

### ●鴻

- ・エイズとともに語られてきた機能不全の身体 から錯乱する身体
- ・テロの身体が錯乱する身体と結びついていた

・アジア演劇はさまざまな場所によって違った形で近代と触れ合っている  
その異質なものの接合をサイボーグ

### ●memo

- ・絶え間ない無化作業の中での記憶化 想像力
- ・Yes, Yes, Yes なんか 最後のシーンは？

### ●9.11 の衝撃は何か

- ・死者の数か？
- ・暴力の主体か 目に見えない敵か
- ・暴力の対象か アメリカか
- ・暴力の形態か
- ・暴力の大義名分か
- ・暴力の提示か 劇場型の暴力

常に時代の技術革新の中で変化してきた

戦争がわれわれの自明性に突きつけられている

戦争がどこで起きているのか

## 「トマトを食べるのをやめたとき」について

この作品には主だったストーリーや筋はないし、もともになる原作もない。

あるいは固定した主題があるわけでもない。この作品を生み出すものは、観客の眼前に立つ俳優たちの身体であり、その身体の記憶から生まれる想像力である。

この作品は、観客をそこに迎え入れるためにあらかじめ用意されたたとえば堅牢な建築物ではないのだ。むしろわれわれは観客とともに被造物のまだ何もない荒野に立とうとしている。

意図すること、それを断念すること。生み出すこと、それを消滅させること。

その往還の中で揺れ動き続ける、今、ここ、での生そのものが、この作品の実体をなすのだ。

作品は一回毎の上演の中で、その上演の瞬間毎の現在の中で、初めてその姿を現すのだ。

連綿と続く有形無形の動きや声、言葉の断片。それらいくつもの生の挙動が折り重なり、時にぶつかり合い、同調し、ズレ、交錯する。

上演以前にわれわれはこの作品の本当の姿を知ることはない。この作品は、その上演の場で、われわれがそこで何を見、何を聞き、何に触れたのか？ そして、何を見ず、何を聞かず、何に触れなかったのか、についての“報告”になるのだ。

だから、上演以前に用意されるこの作品タイトル「トマトを食べるのをやめたとき」—S.I.Witkiewiczのテキストから偶然見つけられた—は、上演の場で生み出されていく俳優達のこの報告を、観客が記憶に留めて置く為の「引き出し」につける“ラベル”のようなものなのだ。このラベルの意味と上演の内容とは直接的な結びつきを持たない。だがその無関係な言葉と上演がセットになってこの作品は見る者の記憶の中でさらに発展し続けることになるだろう。

だが同時にまたこのラベルは、私たちににとってはさらにより重要な意味を持つことになったのだ。私たちが昨年そのラベルにしようとする言葉を見つけた時点で遭遇した重要な記憶を留めてもいるからだ。すなわち「September 11」についてである。

想像を絶する暴力の映像が、あまりにも美しく、果てしなく繰り返される中で、われわれはその出来事を、自らの内になんら確証できないでいる。われわれの身体が世界とますます切り離されていく。瓦礫に、砂に、埋もれた死体のように、われわれの身体が日常の中で何処かに奪われていくのだ。われわれはそのわだかまりの中で、再びこう問いかけるのだ、何を見、何を聞き、何に触れたのか？ いや、われわれは何を見ず、何を聞かず、何に触れてこなかったのか？

偶然見つけたラベルの引き出しの中に、われわれはこのわだかまりを強く留めることになったのだ。われわれがこの作品の上演の中で行う報告の数々は、たとえその一部でも、このわだかまりへの答えになるだろう。この引き出しがその答えで一杯にならない限りこの作品は、われわれを挑発することと止めない。まだ隠されているかも知れない新たな答えの可能性が上演の場で報告されつづける限り、この作品は、上演ごとに、その一瞬ごとに、あらたな相貌を呈し発展しつづけることになるだろう。

## 新規

かつて記号はそれが示す内容と呼び起こすことが出来たのかも知れない

だが、今日の事態は、全くそれは不可能になった。

想像を越える経験

のなかでわれわれはどんな表象を持ちえるだろうか

その不可能性中から立ち上がらなければならない

### 「トマトを食べるのをやめたとき」について

この作品には主だったストーリーや筋はないし、もともになる原作もない。

あるいは固定した主題があるわけでもない。この作品を生み出すものは、観客の眼前に立つ俳優たちの身体であり、その身体の記憶から生まれる想像力である。

この作品は、観客をそこに迎え入れるためにあらかじめ用意されたたとえば堅牢な建築物ではないのだ。むしろわれわれは観客とともに被造物のまだ何もない荒野に立とうとしている。

意図すること、それを断念すること。生み出すこと、それを消滅させること。  
その往還の中で揺れ動き続ける、今、ここ、での生そのものが、この作品の実体をなすのだ。  
作品は一回毎の上演の中で、その上演の瞬間毎の現在の中で、初めてその姿を現すのだ。  
連綿と続く有形無形の動きや声、言葉の断片。それらいくつもの生の挙動が折り重なり、時にぶつかり合い、同調し、ズレ、交錯する。  
上演以前にわれわれはこの作品の本当の姿を知ることはない。この作品は、その上演の場で、われわれがそこで何を見、何を聞き、何に触れたのか？ そして、何を見ず、何を聞かず、何に触れなかったのか、についての“報告”になるのだ。

だから、上演以前に用意されるこの作品タイトル「トマトを食べるのをやめたとき」—S.I.Witkiewiczのテキストから偶然見つけられた—は、上演の場で生み出されていく俳優達のこの報告を、観客が記憶に留めて置く為の「引き出し」につける“ラベル”のようなものなのだ。このラベルの意味と上演の内容とは直接的な結びつきを持たない。だがその無関係な言葉と上演がセットになってこの作品は見る者の記憶の中でさらに発展し続けることになるだろう。

だが同時にまたこのラベルは、私たちににとってはさらにより重要な意味を持つことになったのだ。私たちが昨年そのラベルにしようとする言葉を見つけた時点で遭遇した重要な記憶を留めてもいるからだ。すなわち「September 11」についてである。  
想像を絶する暴力の映像が、あまりにも美しく、果てしなく繰り返される中で、われわれはその出来事を、自らの内になんら確証できないでいる。われわれの身体が世界とますます切り離されていく。瓦礫に、砂に、埋もれた死体のように、われわれの身体が日常の中で何処かに奪われていくのだ。われわれはそのわだかまりの中で、再びこう問いかけるのだ、何を見、何を聞き、何に触れたのか？ いや、われわれは何を見ず、何を聞かず、何に触れてこなかったのか？  
偶然見つけたラベルの引き出しの中に、われわれはこのわだかまりを強く留めることになったのだ。われわれがこの作品の上演の中で行う報告の数々は、たとえその一部でも、このわだかまりへの答えになるだろう。この引き出しがその答えで一杯にならない限りこの作品は、われわれを挑発するところを止めない。まだ隠されているかも知れない新たな答えの可能性が上演の場で報告されつづける限り、この作品は、上演ごとに、その一瞬ごとに、あらたな相貌を呈し発展しつづけることになるだろう。

## 新規

かつて記号はそれが示す内容と呼び起こすことが出来たのかも知れない  
だが、今日の事態は、全くそれは不可能になった。  
想像を越える経験  
のなかでわれわれはどんな表象を持ちえるだろうか  
その不可能性中から立ち上がらなければならない

こう

### 8.6 荒野へ進み出ること

品 memo

サラエボや刑務所での『ゴドー』の上演

自分たちの状況を見て取る

—20世紀芸術は、“密室的な監禁状態”を表象しようとする。監視下にあるものをスペクタクルとして見るという逆説的な状態をわれわれに経験させる

—ベケットの空間を特徴付ける密室的な閉鎖性こそ、フーコーに倣うならば、スペクタクルの終焉の果てに、われわれが手にした劇の形式 さらにこうした状況における行動の不可能性 「アウシュビッツ以降、芸術は不可能である」というアドルノ的提起に対する一つの解答 演劇は不可能性を提示しつつ、衝撃を与えるもの

## タイトル

即興的な創作方法をとっているダムにとって、  
タイトルは記憶の引出しのラベルだ

がしかし今回のトマトを食べるのをやめたときは二つの点で異なる

1. 名前をつけた時点にまつわる出来事 舞台への強いモチベーションを構成する

## 作品の挑戦

意味の生成を、出来る限り、上演の場にゆだねること

## memo

9.11 のショックによる反省的回路の喪失

芸術は現実に対する応答である

### ●鴻

- ・エイズとともに語られてきた機能不全の身体 から錯乱する身体
- ・テロの身体が錯乱する身体と結びついていた
  
- ・アジア演劇はさまざまな場所によって違った形で近代と触れ合っている  
その異質なものの接合をサイボーグ

### ●memo

- ・絶え間ない無化作業の中での記憶化 想像力
- ・Yes, Yes, Yes なんか 最後のシーンは？

### ●9.11 の衝撃は何か

- ・死者の数か？
- ・暴力の主体か 目に見えない敵か
- ・暴力の対象か アメリカか
- ・暴力の形態か
- ・暴力の大義名分か
- ・暴力の提示か 劇場型の暴力

常に時代の技術革新の中で変化してきた

戦争がわれわれの自明性に突きつけられている  
戦争がどこで起きているのか

## 「トマトを食べるのをやめたとき」について

この作品には主だったストーリーや筋はないし、もともになる原作もない。  
あるいは固定した主題があるわけでもない。この作品を生み出すものは、観客の眼前に立つ俳優たちの身体であり、その身体の記憶から生まれる想像力である。

この作品は、観客をそこに迎え入れるためにあらかじめ用意されたたとえば堅牢な建築物ではないのだ。むしろわれわれは観客とともに被造物のまだ何もない荒野に立とうとしている。意図すること、それを断念すること。生み出すこと、それを消滅させること。その往還の中で揺れ動き続ける、今、ここ、での生そのものが、この作品の実体をなすのだ。作品は一回毎の上演の中で、その上演の瞬間毎の現在の中で、初めてその姿を現すのだ。連綿と続く有形無形な動きや声、言葉の断片。それらいくつもの生の挙動が折り重なり、時にぶつかり合い、同調し、ズレ、交錯する。上演以前にわれわれはこの作品の本当の姿を知ることはない。この作品は、その上演の場で、われわれがそこで何を見、何を聞き、何に触れたのか？ そして、何を見ず、何を聞かず、何に触れなかったのか、についての“報告”になるのだ。

だから、上演以前に用意されるこの作品タイトル「トマトを食べのをやめたとき」—S.I.Witkiewiczのテキストから偶然見つけられた—は、上演の場で生み出されていく俳優達のこの報告を、観客が記憶に留めて置く為の「引き出し」につける“ラベル”のようなものなのだ。このラベルの意味と上演の内容とは直接的な結びつきを持たない。だがその無関係な言葉と上演がセットになってこの作品は見る者の記憶の中でさらに発展し続けることになるだろう。

だが同時にまたこのラベルは、私たちににとってはさらにより重要な意味を持つことになったのだ。私たちが昨年そのラベルにしようとする言葉を見つけた時点で遭遇した重要な記憶を留めてもいるからだ。すなわち「September 11」についてである。想像を絶する暴力の映像が、あまりにも美しく、果てしなく繰り返される中で、われわれはその出来事を、自らの内になんら確証できないでいる。われわれの身体が世界とますます切り離されていく。瓦礫に、砂に、埋もれた死体のように、われわれの身体が日常の中で何処かに奪われていくのだ。われわれはそのわだかまりの中で、再びこう問いかけるのだ、何を見、何を聞き、何に触れたのか？ いや、われわれは何を見ず、何を聞かず、何に触れてこなかったのか？ 偶然見つけたラベルの引き出しの中に、われわれはこのわだかまりを強く留めることになったのだ。われわれがこの作品の上演の中で行う報告の数々は、たとえその一部でも、このわだかまりへの答えになるだろう。この引き出しがその答えで一杯にならない限りこの作品は、われわれを挑発することと止めない。まだ隠されているかも知れない新たな答えの可能性が上演の場で報告されつづける限り、この作品は、上演ごとに、その一瞬ごとに、あらたな相貌を呈し発展しつづけることになるだろう。

## 新規

かつて記号はそれが示す内容呼び起こすことが出来たのかも知れない  
だが、今日の事態は、全くそれは不可能になった。

想像を越える経験

のなかでわれわれはどんな表象を持ちえるだろうか

その不可能性中から立ち上がらなければならない

### 「トマトを食べのをやめたとき」について

この作品には主だったストーリーや筋はないし、もともになる原作もない。

あるいは固定した主題があるわけでもない。この作品を生み出すものは、観客の眼前に立つ俳優たちの身体であり、その身体の記憶から生まれる想像力である。

この作品は、観客をそこに迎え入れるためにあらかじめ用意されたたとえば堅牢な建築物ではないの

だ。むしろわれわれは観客とともに被造物のまだ何もない荒野に立とうとしている。意図すること、それを断念すること。生み出すこと、それを消滅させること。その往還の中で揺れ動き続ける、今、ここ、での生そのものが、この作品の実体をなすのだ。作品は一回毎の上演の中で、その上演的瞬間毎の現在の中で、初めてその姿を現すのだ。連綿と続く有形無形な動きや声、言葉の断片。それらいくつもの生の挙動が折り重なり、時にぶつかり合い、同調し、ズレ、交錯する。上演以前にわれわれはこの作品の本当の姿を知ることはない。この作品は、その上演の場で、われわれがそこで何を見、何を聞き、何に触れたのか？ そして、何を見ず、何を聞かず、何に触れなかったのか、についての“報告”になるのだ。

だから、上演以前に用意されるこの作品タイトル「トマトを食べるのをやめたとき」—S.I.Witkiewiczのテキストから偶然見つけられた—は、上演の場で生み出されていく俳優達のこの報告を、観客が記憶に留めて置く為の「引き出し」につける“ラベル”のようなものなのだ。このラベルの意味と上演の内容とは直接的な結びつきを持たない。だがその無関係な言葉と上演がセットになってこの作品は見る者の記憶の中でさらに発展し続けることになるだろう。

だが同時にまたこのラベルは、私たちににとってはさらにより重要な意味を持つことになったのだ。私たちが昨年そのラベルにしようとする言葉を見つけた時点で遭遇した重要な記憶を留めてもいるからだ。すなわち「September 11」についてである。想像を絶する暴力の映像が、あまりにも美しく、果てしなく繰り返される中で、われわれはその出来事を、自らの内になんら確証できないでいる。われわれの身体が世界とますます切り離されていく。瓦礫に、砂に、埋もれた死体のように、われわれの身体が日常の中で何処かに奪われていくのだ。われわれはそのわだかまりの中で、再びこう問いかけるのだ、何を見、何を聞き、何に触れたのか？ いや、われわれは何を見ず、何を聞かず、何に触れてこなかったのか？ 偶然見つけたラベルの引き出しの中に、われわれはこのわだかまりを強く留めることになったのだ。われわれがこの作品の上演の中で行う報告の数々は、たとえその一部でも、このわだかまりへの答えになるだろう。この引き出しがその答えで一杯にならない限りこの作品は、われわれを挑発するとことを止めない。まだ隠されているかも知れない新たな答えの可能性が上演の場で報告されつづける限り、この作品は、上演ごとに、その一瞬ごとに、あらたな相貌を呈し発展しつづけることになるだろう。

## 新規

かつて記号はそれが示す内容と呼び起こすことが出来たのかも知れない  
だた、今日の事態は、全くそれは不可能になった。  
想像を越える経験  
のなかでわれわれはどんな表象を持ちえるだろうか  
その不可能性中から立ち上がらなければならない

こう

## 8.6 荒野へ進み出ること